

SEVENTH BRAVE

セブンスブレイブ5

チート? NO! もっといいモノさ!

乃塚一翔

nozuka issyou

Illustration: 赤井てら

Princess



クリュス=ラ=ヴァナ

21歳。『帝国』の第2皇女。
食い意地だけは誰にも負けない。

Sniper



ユキシロ クク
雪代九々

18歳。クラス委員。
常識的な感性を持った苦勞人。

Slayer



ダテ マサチカ
伊達雅近

18歳。夜行の幼馴染。
怠惰なイケメン。頭の良さは本物。

Luna Wolf



イヌバシ ヤコク
成伏夜行

18歳。本編の主人公。
力を暴走させるも仲間にも救われる。

Therianthrope



ホウジ

4本の尾を持つ狐の獣人。
戦闘時には容貌が一変する。

Dark Eli



ラーダ

赤きエルフの王。ニーヴァの兄。
人間に激しい憎悪を抱く。

Assassin



ヤナギモト ヘイスケ
柳本平助

18歳。エロスに生きる男。
ブレイキの壊れたスケベ魂を持つ。

Machinery General



キシマ チカゲ
鬼島千影

18歳。脳味噌筋肉。
いつも豪快でテンションが高い。

Kijin



ドウサン=アシカガ

魔族の中で指導的役割を務める男。
帝国に間者を送り込むなど暗躍する。

Succubus



ホイットニー

『帝国』に潜入していた魔族のスパイ。
他者を自在に操る力を持つ。

Samurai



ミマサカ
美作サクラ

18歳。小柄で巨乳の和風美人。
物静かなBL専門の腐女子。

Caesar



ハウロンイン ツツジ
鳳龍院躑躅

18歳。人目を引くお嬢様。
本性は真性のサディスト。

——煙が、空高くまで立ち昇っていた。
高く高く、雲に届いて交わるほどに。

『エリア大森林』奥地、大陸でも指折りの危険地域であるAランクダンジョン『コドク蠱毒ノ孔』。
最早孔と呼ぶには不釣合いなほど深い、落ちれば生きては戻れないと伝えられる地獄の入り口である。

そこから僅か数キロの位置にひっそりと存在する、今となっては大陸でも1、2を争う希少種と成り果てた、純粋なエルフ達の隠れ里。

煙は——火の手は、その村のそこかしこより上がっていた。

「カカカカツ！ 騒ぐ騒ぐ、血が騒いでたまらぬわ！」

炎に包まれ燃え盛る、ログハウス仕立ての家屋群。

それを背にして立ち、牙を剥き出し凶暴な笑みを浮かべる男がいた。

強靱な筋肉で覆われた、2メートルを優に超える巨軀。黒と見間違えるほどに濃く暗々とした青い肌。

その双眸は強膜——白目にあたる部分が、さながら墨を落としたような真黒に染まっている。

手にしているのは己の身長よりも更に長い、頑強とひと目見るだけでも分かる錫杖だった。それを旋風すら巻き起こさんばかりの勢いで嬉々として振り回すこの男は——魔族の重鎮にして最強の存在。通称『鬼神』ドウサン。

「さ、さ、さあ！ おらぬかおらぬか、このドウサンの首を欲せし益荒男は、他におらぬのかあ!？」

振り回されていた錫杖が、遊環をがち鳴らしながら叩き下ろされる。

剣を手に斬りかかってきたエルフの青年の頭蓋が、卵のように砕かれた。

「カカカカッ!! そうだ、やはりこうでなくてはならぬ！ 飛び散る血、裂ける肉、碎ける骨!! 闘争、戦いこそが手前の在り処よ!!」

咆哮のような笑い声をビリビリと響かせ、更に一撃。

エルフの槍使いが、全身の骨が碎ける音を響かせ地面と平行に吹き飛ぶ。激突した大木を十数本巻き添えにした後、見るも無惨な姿で動かなくなった。

「愉快愉快、痛快也！ 今日なんとも良き日よ、生き残ったエルフと手合わせ出来るとはッ!! ここを見つけたカーミラには感謝せねばならんな、あれは本当にいい働きをしてくれるわ!!」

錫杖の石突を地面に打ち付け、まだ足りないとはかりにドウサンは周囲を見渡した。

しかし見えるのは百近いエルフの亡骸のみ。

さほど広い村ではない。ぐるりと見回せば、それだけでほぼ一望できてしまう。

村のほぼ全てに火が回っており、とても家屋に隠れていられる状態ではない。

つまり、これで打ち止めらしかった。

……とは言え、生きているエルフの姿が全く見当たらないわけでもなかった。

ただし——そのいずれも、彼の配下達が相手取っていた。

「むう……手を出さぬよう、言っておくべきであったか？」

軽く唸り声を上げ、己の失敗にドウサンは小さくかぶりを振る。

けれどまさか、今更配下の獲物を横取りするワケにもいかない。中には自分に負けず劣らず、血の気の多い者として居るのだから。

不完全燃焼な気分は無理矢理水をかける。

ドウサンはその場に胡坐をかき、こうなれば配下達の戦いでも見物しているかと、僅かに目を細めるのであった。

——身体が、軋む。骨が、振れる。肉が、千切れる。

熱い熱い熱い熱い、臓腑が焼けそうだ。

いや違う、溶けている。それとも、凍っている？

自分の身体が、一体どうなっているのか分からない。

無事なのか、刻まれてるのか、或いはもう既に失くなっているのか。
分からない分からない、分からないわからないワカラナイ。

「か——ひゅ」

窒息死、水死、焼死、凍死、毒死、溶死、感電死。

自分がどのような攻撃により、どのような原因で死亡したのか。
それすら不明瞭なまま、エルフ達が4人纏めてショック死した。

「……………」

死体が他にも10人分ほど倒れていて、その中心には女が立っていた。

明るい緑色の、綺麗に切り揃えられたショートヘア。

その頭上では、髪と同じ色をした狐の耳が、びくびくと忙しく動いている。

そして背面、尾てい骨のあたりからふっさりと伸びた4本の尻尾。

1本1本を好き勝手に動かしながら、長身瘦躯のその女は、細面にナイフで切れ目を入れた
ような双眸をゆつくりと空に向ける。

「——こおんッ」

そして鳴き声を上げるかのように、小さくそう呟いた。

「はあ……はあ……はあ……」

火の粉が弾け、燃え盛る家屋。

ひと際大きい村長宅のログハウスが、ガラガラと音を立てて崩れていく。

その近くには、息を切らし額に汗を滲ませた、子供と大人の中間とでも呼ぶべき年頃の男が
立っていた。

この世界で珍しい黒髪ということ以外に目立った特徴はない。着ている服も地味なものだ。

彼はつい今し方、最後のエルフを打ち倒した。

足下に転がる死体を見遣り、肩を震わせながら袖で額を拭う。

「——星音さん！ 貴女も少しは手伝って……くだ、さいよ!!」

途中、吐き気を抑えるような仕草を見せて、近くに聳える大樹の上に向けて声を張り上げた。
視線の先には少女が居た。

年頃は男と同じで十代の後半。

白い長袖のワイシャツに細いネクタイをゆるく締めた、青いチェック柄のミニスカート姿だ。

脱色したのであるう長いオレンジの髪は、所々に藍色と赤紫のメッシュが入れられ、シユシユ

でポニーテールに纏めてある。

彼女は樹の枝に腰掛け、ニーソックスとローファーを履いた脚をぶらぶら揺らしている。

丈の余った袖から覗く指先で携帯を弄っていたが、舐めていた棒付きキャンディを摘み取り、
ひどく面倒、或いは気だるそうに視線を下げた。

溶けた飴で甘くなった唇に、ぺろっと舌先を這わせる。

「……ハア？ どうしてマリがあ、そんなことしなきゃイケないワケえ？」

人を心底バカにしたような、若干間延びした口調だった。

男が表情を変えて何か言う前に、彼女は続ける。

「てかあ、もし血なんかついたら服汚れるしー。パスパス、アンタがやんなよ、マリはパス権を行使しまーす」

「なッ……そ、そんな勝手が——」

「通用するから言ってるしー」

怒鳴り声に被せる形で、またも男の言葉を遮った。

そして、ニヤニヤとやはり人をバカにしきった笑みで、彼を見下ろす。

「アンタみたいな根暗っぽくて、パシリ属性ついてるジミー君なら、どうなろうとだーれも気にしないし。それでもマリに意見したかったら、全身整形して6番窓口から出直してください、キャハハハハッ!!」

「ふ——」

ふざけるな。そう怒声を上げようとした青年だったが、既に彼女は音も立てず、樹上から消えていた。

「なッ……」

慌てて周囲を見渡すも、もう誰も居ない。何も言い返せないまま逃げられてしまったのだ。

左右に視線を向けた後、そのことに気付いた男はぎしりと歯を鳴らし、拳を強く握り締めた。

「あの、クソビッチがッ……!!」

静かな怒気を込めて、あらん限りの怨嗟を吐き出すのであった。

——赤い髪の男女が、相対している。

片や厳格そうな顔つきをした初老の男。

頭の両サイドから伸びる長い耳と浅黒い肌から、ダークエルフであることが見て取れる。

片やボサボサの長髪を乱雑に伸ばし、下着のみに身を包んだ若い女。

華美な装飾の施されたレイピアを杖代わりに地面に突き刺し、肩で息をしている。

「……衰えたな、妹よ」

そんな女の姿を正面から見遣り、男は憐れむように、ゆっくりとかぶりを振った。

「それにその姿……若さを保つため、フロイライン家の秘薬にでも手を出したか？ 寿命そのものが変わるワケでもあるまいに、女とはつくづく哀れな生き物だな」

「るッ……せえ!!」

女——ニーヴァは、ボロボロの身体とは裏腹な覇気の籠もった声で、男に怒鳴った。

彼女の中に渦巻いている強烈な怒りが、ダメージを超越している証だった。

「魔族になんぞ尻尾振りやがって、クソ兄貴が！　その上、同族にまで手を出すほどのバカだったとは考えもしなかったぞ、このロクデナシ!!」

「なんとでも言うがいい、最早エルフの時代は終わったのだ。赤の王族も、残すところ私と貴様のみ。人間と交わった青の王族に至っては、既に亡きも同然の存在」

「……まだ人間を怨んでやがんのか。もう当事者なんぞ誰も生きちゃいねえ、持ってた所で何の意味もねえ見当違いな怨みだ!!」

ニーヴァが吼える。男はそれを鼻で笑い飛ばした。

「ならば、今生きている人間共に償わせるまでの話。復讐を果たせるのなら、私は魔族にだらうと獣にだらうと従うまで」

「いつまでも古傷を自分でこねくり回しやがって……目え醒ましやがれ!!」

「醒めているからこそ、いつまでも忘れん。このような場所に隠れ住む貴様とは違うのだ」
そう言っただけ男はニーヴァに歩み寄る。

肉体が限界を迎えている彼女は、退くことも戦うことも出来なかった。

「ッぐ!？」

「そして、何も私は昔話をするために、わざわざ貴様を生かしておいたワケではないぞ」

ニーヴァの髪を掴み、無理矢理に顔を持ち上げる。

地面に突き刺していたレイピア『ブルーローズ』が、小さく音を立てて倒れた。

それを見た男が、またもフンと鼻で笑う。

「貴様こそ、いつまでも下らん思い出に縋りおって……聞こう。かつて貴様が昔持ち出した指輪は、今どこにある？」

「ッ……指輪だあ？　さあてな、なんのことやら……がッ!？」

腹部を殴られた衝撃で、ニーヴァは肺の空気を強制的に吐き出させられる。

咳き込む彼女を見下ろし、男は繰り返し返した。

「もう一度聞く。エルフレッドの秘宝『双竜主ソロモン』は今どこにある？」

「……知るかよ……バーカッ」

殴打。そして詰問。

けれどニーヴァは答えず、焼き回しのように同じことが何度も繰り返される。

……じきに男の方が業を煮やし、掴んでいたニーヴァの髪を離した。

次いで傍に落ちていた『ブルーローズ』を拾い上げる。

「どうあっても答えないつもりか。ならもう良い、何も語らぬまま青薔薇に貫かれ、死ね」

「ッ……」

喉元に突きつけられた鋭利極まる切っ先。

ニーヴァは何とか身を振って逃れようとするも、ダメージで動けなかった。

「愚かなことだ……大人しく従っておけば、兄妹の情もかけてやったというのに……」

「ハッ……えらっそーに……死ね、カス」

「……相変わらず、口の減らぬことだな」

もうまともに立つことすら出来そうにない状態にも拘わらず、命乞いのひとつすらしない。男はもう一度かぶりを振った後、一切の躊躇なくニーヴァの喉笛を貫こうとした。

——バリーントッ！

「むッ!?」

けれどその寸前、液体で満たされたフラスコを背後からぶつけられた。

思いもよらなかったことに、一瞬だけ男の動きが止まる。

そして自分が何をぶつけられたのか、すぐさま理解した。

「石化薬か……ッ!!」

薬品を浴びた背中を始点に、全身が石へと変わっていく。

その速度からしてかなりの技術で作られた魔法薬であることは、確かめるまでもなかった。

「やはり、フロイライン家の生き残り……く、だが私に石化など……!」

背中が始どが石と化したあたりで、石化が突然ぴたりと止まる。

それどころか、今し方の光景を逆再生するかのように、背中の石化があつという間に元に帰っていった。

——だが。

「……逃がした、か」

石になった身体が完全に元に帰った時には、眼前に倒れていたニーヴァの姿はどこにも無く、ただ飛び散った血の跡と、男の手に握られた『ブルーローズ』だけが、静かに残っているのみだった。

村から少し離れた、人間界へ続く森の獣道。

その道を、傷だらけのニーヴァを背負い走る小さな影があつた。

「あうあうあう……ちょ、どうなってるのさ一体……!」

ガサガサと茂みを掻き分け、足を止めることなくマレイシヤは進む。

とにかく今は、少しでも早く村を離れることが先決であつた。

「ニーヴァさん! ニーヴァさん、聞こえる!? ボクの鞆に回復薬が入ってるから、それ飲んで!」

「う、あ……」

小柄なマレイシヤに運ばれているため、爪先をずるずると地面に引き摺りながら、震える指先で肩掛け鞆からフラスコを取り出すニーヴァ。

こく、こく。

薬を嚥下する音を背中越しに聞き、マレイシヤは更に言う。

「飲んだ!? 飲んだら、次は同じ奴を身体にぶつ掛けて! 外傷はその方が早く治るから!」
傷をすぐさま治せる回復薬は稀少であるが、以前夜行達が来た際に材料をかなり手に入れたため、幾つか作ることが出来た。

回復薬が早速効いてきたのか、先程よりも確かな手つきで、ニーヴァは同じ色の薬品で満たされたフラスコを取り出し、頭から被る。

「……ぐ……悪いな、マレイシャ……たす、かった」

「お礼とかヤメテよ! ニーヴァさんがそんなこと言うなんて縁起でもないんだから!」

「どういう意味だ、そりゃ……」

マレイシャの背で苦々しげな表情かおをしながら、ニーヴァが呟いた。

そして彼女の背から離れ、若干ふらつきながらも自分の脚で立ち上がる。

「よし……何とか、走れそうだ……行くぞ」

「うん! でもニーヴァさん、ボク達これから一体どうすれば……」

常日頃から能天気であるマレイシャが、珍しく弱気な声でそう問い掛ける。

無理もない。何せ自分達の村が何の前触れも無しに魔族の襲撃を受け、命辛々逃げ出している状態なのだから。

薬のお陰で、つい1分前までは立つことすらおぼつかなかったにも拘わらず、既に軽く走っているニーヴァは、若干考え込むような仕草を見せる。

「……帝都だ。ヤコウ達のとこに行くぞ。あいづらならウチらを無下むげにはしねえだろうし……
何より、奴が出張ってきたことを報せねえと……」

骨折したアバラが急速に治癒する痛みで顔を顰しかめさせながら、ニーヴァは隣のマレイシャにすら聞き取れない小声で呟く。

「ドウサン……まさか、あんな大物が魔国から出て来やがるとは……」

僅かに震えを帯びた声。

かつての記憶と共に呼び覚まされる恐怖を振り払うように、ニーヴァは走った。

「おや。このような所に、まだ取りこぼしが」

そんな彼女らの眼前に、しゃらしゃらと靡なびく金紗きんしゃの髪を持つ女が、唐突に現れた。

その女——ホイットニー——カーミラの傍らには、フードですっぽりと姿を覆い隠した2人組が控えている。

「ですが、ちょうどよろしゅうございました。他の皆様に獲物とりものを悉く取られてしまい、私、人形のデモンストレーションが出来ず、困っていたのです」

薄絹の黒いドレスを身に纏ったホイットニーは、そう告げて妖艶に笑む。

対してニーヴァとマレイシャの2人は、顔を青褪あおぞめさせるばかり。

「ご心配はなさらずに。他の皆様とは違い、出来るだけ綺麗に殺して差し上げますので。骸むくろとなつてまで、恥をかくのはお嫌でしょう?」

——森の惨劇が終わるには、まだ早い。

▽

雲ひとつ見当たらないほど良く晴れた、真夏の早朝。

ラ・ヴァナ帝国、帝都宮殿の中庭の一角に、延べ十数人ほどの集まりがあった。

丁寧にアイロン掛けされた執事服に袖を通した、品の良さそうな初老の男性。

スカートの短いナース服を着た、治療師の女性。

そして、十代後半から二十代半ばほどの、歳若いメイド達が5人。

更にその少し前に横一列で立っている、帝国決戦部隊『セブンスターズ』の面々。

「皆様、ようこそお集まりいただきました！ 旅行の支度に、何か手落ちはありませんかあ？」

音頭を取るのは、帝国第2皇女クリュスIIラ・ヴァナ。

横に立つ姉の第1皇女リスタルが苦笑するほどのハイテンションで、彼女はくるくる回っていた。

「ではでは、まずは点呼を取りましょう！ 『セブンスターズ』の皆様から、隊内序列順に、さあ！」

やがてぴたりと動きを止め、隊内序列1番である千影を勢い良く指差すクリュス。

この場に居る誰よりも大柄な巨漢は、にいつと頑丈そうな歯を剥き出して笑った。

「ッしゃ！ one！」

高く伸ばした腕。天を突き上げるように聳え立てられた1本指だ。

「……二！」

続いてサクラが、いつもの無表情で横ピースをしながらか言った。

「dreei！」

三番手である夜行は、左手の親指、人差し指、小指を立てる。

「quatre！」

ふわふわした笑みを浮かべる躑躅は、控えめなダブルピース。

「khamssa！」

手の甲を外側に向け五指を開く、無駄にキメ顔な平助。

「ハア……六！」

九々は溜息を吐きながら、普通に6本指を立てた。

「pito！」

静かに呟き、片手の指を4本だけ立てた雅近。が、よく見ればその足下にある影は、光の当たり具合で指を3本立てたように映っていた。

——ともあれ、これにて『セブンスターズ』は点呼終了。



彼ら7人を見渡した後、クリュスはその眠気を帯びたような表情に、ほんのりと笑みを浮かべる。

「はい、大変結構です。誰1人として使用言語すら被っていない衝撃的な統一感の無さ、逆にチームワークを感じてしまいますね!」

褒めているのか貶しているのか、深読みしたらキリがない発言だった。
リスタルが妹と同じように7人を見渡す。

「……ねえ、くりゆす? このひとたちで、ほんとうに、だいじょうぶなの……?」
なんとも怪訝な顔をしながら、そう尋ねた。

外見や口調こそ儂げだが、流石クリュスの姉だけあってなかなか言う女性である。

「大丈夫ですよ、お姉様。こんなでも、やる時はやってくる方々です」

「そう……? わたしは、へーすけいがいい、よくしらないから……だから、ちょっと、しんぱい……」

「……姫君は言うまでもないが、意外と姉君も失礼だな」

「てかりちゃん? それ、つまり俺たちに対して心配抱えてるってこと? ねえ?」

眉間に皺を寄せる雅近と、釈然としない様子で詰め寄る平助。

顔や表面的な性格は全然似ていないが、2人が確かに姉妹であると感じた瞬間だった。

「そう言や姫ちゃん、どうやって『烏合山』まで行くん？ 昨日地図で場所を確認したら『森羅衆』との国境近くで、ここから軽く800キロは離れてたっしょ」

至極もつともである平助からの質問。

「ふえ？ もちろん、歩いてですけど」

クリュスのあんまりな発言に、嘆息する気すら起きなかった雅近は淡々と踵を返した。

「諸君、残念だが旅行は中止だ。お疲れ、解散、またいつか」

他の者も雅近に追従する。

「ちょ!? ま、待って、待ってください！ ジョーク、ジョークですから、軽いプリンセスジョークですから！」

まさかこのような反応をされるとは露ほども思っていなかったらしく、帰ろうとする面々の正面へと、わたわた慌てて先回りするクリュス。

「……紛らわしい冗談は止めてくれ、姫君。オレは片道2キロ以上は、天変地異でも起きない限り歩かない主義なんだ」

「本気で800キロも歩かせる筈ないじゃないですか、何その苦行!! お姉さまだって居るんですよ!」

声を張り上げた彼女が指差す先には、強く抱き締めればあっさりと折れてしまいそうなくらい華奢なりスタルの姿があった。

確かに夜行達の持ち帰ったポーシヨンの薬効により、治療師同伴とは言え今回の旅行に参加できるほど容態が回復した彼女だが、未だ半病人であることには変わらない。

800キロどころか3キロも歩かせれば、間違いなく倒れてしまうだろう。

幾らなんでもそのようなことをさせるワケがない。

そして無論のこと、雅近もそれくらいは理解していた。要するに、面白くもない冗談がどのような結果を招くのか、分かりやすい形で示しただけである。

「で、本当は何を使うんだ？ まあ大方、国内十数ヶ所のダンジョン近辺にはどこでも置かれている転送魔法陣だろうが」

「分かっているならどうして帰ろうとするんですか！ 前々から思っていました、マサチカ様はもう少しわたしを敬うべきなのです！ わたし、皇女様！ 年長者！ 21ちゃん!!!」

囁んだ。皇女の威厳も21歳の尊厳も、何もかも存在からして霧散した。

「……ああ、悪かった悪かった。お姫ちゃまに対して失礼でちたね、ごめんなちゃん」

「怒った！ 怒りました、堪忍袋の緒がぶちぶち切れました!! 必殺プリンセスローリングサンダー、皇女の怒りを受けてみるー!!!」

この上なくムカつく誠意の欠片もない謝罪をされ、クリュスがキレた。

彼女は両腕をグルグルと激しく回転させた、いわゆる駄々っ子パンチで雅近へと突撃する。

が、悲しきかな。伊達雅近174センチ、クリュスⅡラ・ヴァナ142センチ。

その身長差は実に32センチ。

両者の間に存在するのは、どう足掻いても埋めようのないリーチの差だった。

「遠心力の重みを知れー！」

「当たらなければどうということはない」

間合いの外から額を押さえられたクリュスの腕は、虚しく空転するばかりだった。

▽

「しかしまあ、転送魔法陣か……出来ればあんま使いたくないんだよな、アレ」

魔法陣の置かれている『魔術殿』までの道すがら、夜行がそうぼやいた。

何せ以前、夜行は魔力拒絶体質によって転送魔法陣に弾かれ、この世で最も嫌う虫が跋扈する地獄へ予告無しに飛ばされてしまったのだ。

その声を聞き、僅かながら眉間に皺を寄せる雅近。

「……む」

「戌伏君……」

苦笑して頬を掻く夜行に、躑躅はそつと寄り添う。

残る仲間達も短い間ではあったが、一様にどこか陰の差した表情を浮かべた。

「ヤコウ様……こ、今回は絶対大丈夫なのです！ちゃんと拒絶中和剤も用意しました！」

ぎゅつと両の拳を自分の胸に押し付けながら、クリュスが力強くそう告げる。

すると後ろを歩いていた治療師の女性が、薄い紫色の錠剤で満たされた小さなガラス瓶を夜行に手渡した。

「やれやれだ……それにしても姫君、転送魔法陣を使うなら、最初から魔術殿に集まれば良かったんじゃないのか？」

ふと、億劫そうな口調で雅近が尋ねた。

空間転移という大規模な効果をもたらす転送魔法陣は、ひどく繊細な構造となっている。それ故に事故を防ぐため、魔術殿の一角、宮殿敷地内の片隅に配置されているのだ。

宮殿の敷地は凄まじく広く、端から端まで歩くと下手すれば1時間はかかる。

本殿から魔術殿まで行くにも、当然それなりに歩く必要があった。

「全く……いっそ宮殿内の通路を動く床にでもすればいいんだ。そうすれば、寝てても目的地に着く」

「幾らなんでもそんな不精にお金は使えないのです……それに、中庭集合の方が近かったので」

「……？」

クリュスの言葉に矛盾を感じた雅近が、怪訝な表情になる。

移動手段が転送魔法陣ならば、どう考えても魔術殿集合が最も近い。

その発言の真意を聞き質す前に、魔術殿の渡り通路まで続く道から逸れたクリュスは、くると振り返った。

「さて皆さん、出発前に少し第3練兵場へ立ち寄りましょうか。昨晚の内に、そこへ運んでありますので」

彼女は再び前を向き、てててと小走りで行ってしまふ。

一同は顔を見合わせ、各々頭上に疑問符を浮かべながら、クリュスの後ろ姿を追うのだった。

Ψ

第3練兵場。

本殿裏手に設けられた、主に近衛隊が使用する訓練場。

つい半月ほど前、クリスティアーネの凶刃を受けた夜行が自身の力を暴走させ、『娼啜』が歪な進化を遂げた場所である。

既にその時の傷痕はすっかり修復されていた。早朝だからか訓練に励む兵士達の姿も無い。

その代わり、練兵場中央部に大きな黒いコンテナのような物が置かれ、そのコンテナを囲む形で、幾人もが忙しなく動き回っていた。

「あ、皆様！ こっちです、こっちー！」

それらの人影に混じり、びよこびよこ跳ねて自己主張するクリュス。

横で紙束に目を通しつつ、周りの者達から何かの報告を受けていた男もまた、彼女の呼び声に顔を上げて一同の存在に気付く。

「おおおおやおやおやおやおや、ご到着でございますかああああ？」

病かと疑うほどに痩せこけ、怪しげに爛々と輝く双眸の下に、濃い隈を刻んだ中年男性。

彼は持っていた紙束を用済みとばかりに放り捨てると、なんとも大仰な仕草で両腕を開いた。

「こちらの予定より、3分ほど早ああああい！ だがしかし、物事に不確定要素はああああ、付き物！ 既に準備は、整って整って整っておりますればッ!!」

「……相変わらず、妙なテンションの人ですねえ……」

困ったような笑みを浮かべ、そう呟いたのは躑躅だった。

他の面子もどう対応すべきか悩ましげに、男を見遣っている。

——彼の名はエニグマ・タングラム。

帝国が誇る最高の技術者にして『技術殿』統括官。テスラと同じ4將軍の1人、技術將軍である。

「みずばらしい格好で、申し訳なああああい！ けれどもけれどもけれども、かれこれ2週間ほど不眠不休でございまして、どうかご容赦いただきたいッ!!」

「「いや、寝ろよ!?!」」

血走った目でけらけら笑うエニグマの言葉に、何人かの突っ込みの声が重なる。

よく見れば、足元をふらつかせていた。

クリユスが溜息を吐く。

「無駄なのです。わたしも繰り返そう言ったのですが、聞く耳を持ってくれなくて」

「当然でございましょうッ！ 我輩、今は眠る暇すら惜しいのでございますよッ!! ああ、それは何故!? 何故何故何故!? ミマサカ様、どうか我輩にいいいい、聞いてくださいますッ!!」

たまたま目に付いたらしいサクラを指差し、ハイテンションで要求するエニグマ。

「……私？」

サクラは眉根を寄せて嫌そうにしたが、聞かなければきつと話が進まない。幾許か無言の時間の後、仕方なく口を開いた。

「どうし——」

「溢れ出る創作意欲がああああ！ 抑え切れない！ からで！ ございましょうッ!!」

「……ッ」

チャキッ。

「待て美作、耐えてやれ。気持ちには分かるが、この男の言動は基本的にスルーした方が早い」
自分で聞いてくれと言っておきながら、思いっきり無視された。

無表情のまま額に青筋を浮かべ、『流桜』の鯉口を切ったサクラを雅近が止めた。

剥き出しの肩が、ブルブル震えている。

そんな光景など眼中にもないエニグマは話を進める。

周りの技術者達もその態度には慣れっこらしく、まるで意に介さず作業を続けていた。

「ああ、ああ、ああ！ ダテ様より数々の情報提供をいただき、魔術殿と共同で作り上げた全くの新技術！ ドキがムネムネ、収まりませえええんッ！」

ぎゅるんぎゅるんと片脚立ちで回転しながら、感激を露わにする中年男性。

夜行の脳裏に、さすらいのダンサーを自称する某エルフの姿が浮かび上がった。

もし彼らが出会うことがあったなら、個性派同士きつと仲良くなれるに違いない。

「伊達君、この人に何か教えてあげたんですかあ？」

「魔力発電機を作らせてから、妙に懐かれてな。こいつのお陰でゲームやタブレットが復活したのも確かだから、技術本の電子書籍を片っ端から翻訳してやったんだよ」

「まさに！ 知識の泉、革新の嵐でございましたああああッ！ すばらし、すばらし、すばらしッ!!」

今度は感極まった様子で、涙を流しながら天上を仰ぐ。

徹夜続きでテンションがおかしいのか、それとも元からこんな感じなのか。

彼の目に隈が浮かんでいない日を見たことがない一同には、おおよそ判断がつかない。

「……んで、結局この人何を作ったワケ？ 委員長の新兵装云々は聞いたけど、考えてみれば

具体的にどんな物かまでは知らされてなかったわ」

「そう言えば、俺様も聞いてないぞ」

夜行と千影の視線は、必然、未だ閉じられたままのコンテナに向けられた。

「確かに言っただけじゃなかったわね……えっと——」

「御説明は我輩がいたしましょう、ユキシロ様あああッ！」

「ぴゃあッ!？」

口を開こうとした九々を、ずいと身を乗り出したエニグマが押し留める。

いきなりのドアップに、人見知りの激しい彼女は悲鳴を上げ、脱兎の勢いで夜行の後ろに隠れた。

「エニグマさん、あんまウチの子いじめないであげて」

「おおおお、申し訳ございませんッ！これで許して、これでッ!!」

勢い良く頭を下げた後、土下座に移行して面を地べたに擦り付ける技術將軍。

決して悪い人物ではないのだが、行動がいちいち大袈裟おおげさと言うか、どうにも対応に困る。

「さあさ、御覧あそばせッ!!」

額に砂をくっ付けたまま、バンとコンテナを叩くエニグマ。

どうやら自動開閉式になっているらしく、小さな駆動音を響かせ開き始めた。

「異界の知識を取り入れることによって実現した、完成まで50年は要すると言われていた新技

術ッ!」

コンテナはまるでパズルのように形を変え、内と外を隔へだてていた壁が取り払われていく。

そして数秒もしないうちに、内部に収められていた物の全容が明らかとなった。

「……え？」

そんな果けた声こぼを零したのは、果たして誰であつたろうか。

そこにあったのは、このファンタジックな異世界に存在する筈はずのない代物しろものだった。

「蓄積ちくせきした魔力エネルギーを運動エネルギーに変換する動力機関、『エンジン』の開発に我々は成功したッ!!」

「」「おおおッ——」」

高らかに宣言するエニグマと、その叫びに呼応し拳を天に突き上げる技術者達。

「そう、眠っている暇などありはしなあああいいッ！この新たな技術、1秒でも早く世に知らしめるためッ!!」

メタリックブルーの装甲に覆われた、フルカウルボディ。

鋭角的なラインと、前後に取り付けられた肉厚の黒いタイヤ。

「苦節ひと月半！寝食を投げ打ち、ひたすら完成を目指したッ！」

日本で見ることのできるものと比較すれば、1.5倍ほども大型。

ナンバープレートやウインカーランプ、ブレーキランプが備えられていないなど、細かな違

いがある。日本で見ることのできるものと比較すれば、1.5倍ほども大型。